

東日本大震災 復興まちづくり 私たちは何ができるのか、ともに考える

私たちは何ができるのか・活動報告 仮住まいの輪実行委員会

2011.05.20

仮住まいの輪実行委員会メンバー

矢部智仁(リクルート住宅総研)

実行委員会発足にあたって

発起人は在阪の建築家、中谷ノボル氏。彼からの「阪神大震災復興支援の経験と反省を活かし、不動産・建設業界に携わる私たちが、専門家としてできることに力をあわせて取り組もう！」という呼びかけに賛同し集結した、業界関係者有志による組織や立場を超えたプロジェクトです。

不動産・建築業に携わる専門家としてできることという流れから、どんな「住宅・暮らしの支援」ができるか、ここから議論は始まりました。今回集まったメンバーの日常的な問題意識として住宅市場の需給ミスマッチによる全国400万戸を超える民間賃貸住宅の空室の存在、一戸建に住む単身生活者の空き床などをどうするのか？という意識を持っていたのですが、今回のプロジェクトでも、そうした**既存住宅ストックを個人所有者の「善意」で仮住まいとして活用**することも念頭には置いていました。

検討にあたって留意したポイント

どんな住宅支援か？発起人・中谷氏の経験談から避難所で過ごす時間を少なくすることは生活再建を冷静に考える時間を獲得することになるはずという視点を重視し、**一時避難所と支援住宅(仮設、公営、借上げ民賃)の間をつなぐ「仮住まい」の提供**が必要ではという方向を定めた(仮設住宅に対する問題意識は裏面参照)。

その方向において、**被災者に不利が生じないことを前提**に現行ルール内において専門家としてできる限りを検討した結果、「**解消しやすい関係**」「**善意が善意でいられる期間設定**」「**しかも個人間**でできる」というしくみとそのバックアップを考えました。具体的には、

- ・ホームページに提供者や被災者がそれぞれ自身の情報を登録し相手を探す仕組みとした
- ・家賃の発生しない『使用貸借』かつ、1～3ヶ月の短期契約(仮住まい)を基本とする仕組みとした
- ・実行委員会に参加した法律家の知見や不動産業者の実務経験から推奨的な契約書式やガイドライン等を掲載し紛争防止を工夫した

また、今回のように被災地域が遠くかつ広範囲であるが故に「自分にも何かできることはないか」という思いが募っても、すぐに行動結び付けられない善意も多いはず。そうした善意を被災された方々に届けるべく、我々がこだわったのは「**顔が見える善意**」を届けるということでした…こちらは実際のサイトに掲示されている情報を参照ください

現状と今後のアクション

登録物件数:212件(削除されていない物。登録累計は260。但しテスト登録含む)

問合せ数:70件、(未確認ながら)実施に仮住まいに入居された世帯は、数十件程度と認識している

今後は呼び寄せたいと考えるサポーターによる支援活動や、現地で情報での本サイト利用支援活動の掲載などもカットオーバー予定

仮設住宅に関する問題意識

避難所か支援住宅(仮設建設中心の施策)において顕在化した課題

1 住環境

- ・時間がかかる = いつまでも避難所を動けない

2 政策コストと実効性

- ・時間がかかった割には、居住空間として貧弱(29.7㎡、建設費234万(実体は+) ÷ 24か月)
今回でいえば、月9万円もあれば60㎡も借り上げることが可能
- ・仮設 = いずれ壊すことを考えると、トータルコストがかかる施策(阪神や中越の際は計4 - 500万)とも

とくに、1の問題は精神的安定という意味でも、衛生上でも早く解消することにこしたことはない